
 学 会 記 事

第6回新潟食道・胃癌研究会

日 時 平成16年11月13日(土)
午後2時20分～
会 場 新潟ユニゾンプラザ
大会議室

I 一般演題
1 TXT化学療法が奏効した食道癌肺転移再発の1例

小林 由夏・野中 雅也・斎藤 優子
藤原 真一・堀高 史朗・杉谷 想一
飯利 孝雄

立川総合病院消化器内科

【はじめに】食道癌は化学療法感受性が良好であるといわれ、CDDP/5FU療法は現在の標準治療法である。しかしFP療法後の再燃や無効例、また治療不耐例に対して化学療法を行う場合、制癌剤の選択は非常に難しい。TXTは2004年1月に食道癌に対して保険適応の追加されたタキサン系新規抗癌剤である。今回、化学放射線療法の前治療歴を有する食道癌、肺転移再発例に対してTXTを用いた化学療法を導入し、奏効したため、報告する。

〔症例〕67歳、女性。2001年2月、頸部食道癌と診断。2001年4月より7月まで、化学放射線療法を施行。CRと判定され、経過観察中、2003年肺転移再発出現。前回治療時、5FUによる副作用と考えられるグレード3の口内炎を合併したため、5FUを含まない二次治療を選択。入院にてTXT 60ミリグラム/m²、CDDP 70ミリグラム/m² (day 1) 点滴静注の治療を、3-4週間あけて3コース施行し、外来治療としてTXT 30ミリグラム

/m²、ネダプラチン 40ミリグラム/m²を、隔週投与した。治療後胸部CT上、右上肺野最大25ミリの腫瘍は8ミリまで縮小、他の結節陰影も癆痕化しPRと考えた。外来経過観察中も増悪を認めていない。

【結語】TXTを用いた化学療法は、5FU抵抗性、または不耐性の食道癌、遠隔転移再発に対する二次治療として、有望であると考えられた。

2 食道バイパス術の2例

桑原 史郎・山崎 俊幸・大谷 哲也
片柳 憲雄・山本 陸生・斉藤 英樹

新潟市民病院外科

【はじめに】悪性食道狭窄に対する経口摂取方法としては簡便・低侵襲性の点から食道ステントが第一選択である。しかしながら食道ステント術はUtMtの狭窄では大血管破綻や嚥下困難、LtAeの狭窄ではステント脱落や逆流性食道炎が問題である。我々は、Y字胃管を用いた食道バイパス術を2例に施行し、良好な結果を得たので報告する。

〔症例1〕76歳男性 Mt領域の食道癌(多発肺転移あり)に対して根治的化学放射線治療を施行した。その4ヵ月後MtUt領域の著明な狭窄で入院となった。ステント留置では頸部食道にステントが達し嚥下困難となると考えY字胃管による食道バイパス術を施行した。術後の経過は良好であり、原病死までの6ヶ月間狭窄症状無く経口摂取が可能であった。

〔症例2〕55歳男性 LtAeの進行食道癌(T4(大動脈)NxM0 Stage IV)に対して根治的化学放射線治療を施行した。10ヵ月後に腫瘍の増大にて食道狭窄を生じ入院となった。食道ステントを試みるもガイドワイヤーが通過せず不可能であった。このためY字胃管による食道バイパス術を施行した。現在術後4ヶ月であるが狭窄症状は無く十分な経口摂取が可能である。

【結語】Y字胃管による食道バイパス術は比較的簡便でありステント不可能例に対しては、試みる価値が充分あると思われる。